

地域特性

商業地域のある北部と、大和川があり、のどかであるが高齢者には外出が不便な南部の地域がある。公営住宅のみで店舗がない地域や昔ながらの戸建て住宅が多い地域など、地域特性は様々である。高齢化率にも特徴があり、瓜破：28.4% 瓜破西18.8% 瓜破東：36.9% 瓜破北：52.7%。平野区全体の27.2%に対し、瓜破全域で29.5%と高齢化率は高い地域である。

4

取り組んだ成果と今後の課題

①郵便局への認知症啓発の取り組み

過去に実施した金融機関についても早期に相談をいただけるようになり、通帳の再発行を繰り返すなどのサインから心配の相談をいただけるようになった。またアンケートの実施と結果の共有により、どのような方を包括に相談できるのかを理解いただく機会となった。

社会資源との連携は先方の都合もあり、業務中に研修や交流の場を開くことは徐々に難しくなりつつある。そのために先方に啓発の意義をしっかりと理解していただく、企画段階での様々なアプローチが重要であると考えている。

②ケースワーカーの地域ケア会議参加

前年度の区役所への要望に挙げていたこともあり、区役所の働きかけからケースワーカーの地域ケア会議への参加は増加してきている。今後、互いの役割を知ること、より早期相談・早期対応に繋げていくことが複合課題への世帯支援の向上に繋がる。

経済的課題は8050問題などの世帯全体の課題であることが多く、その際には困窮の理由や生活状況などケースワーカーとの連携がさらに重要になる。

③男性高齢者の集いの開催

1年を通じ継続的に開催されており、令和2年度も継続予定である。瓜破北地区では男性高齢者が作るカレーを地域の子どもたちに振る舞うなど、既存の地域活動とも繋がってきており、参加者である地域住民が主体となり、地域の課題と包括の考える課題を共有し、協働して取り組んでいる活動となっている。



包括からのひとこと

今後社会資源への啓発活動にて、従業員向けの研修や交流会を先方の勤務時間を割いてや、勤務時間外で企画することが困難になってきています。アンケート等先方の都合に合わせて啓発内容をより考慮していかなければならないです。

また、男性高齢者の集いの場を発展し、継続をさせていく上では、地域や参加者が自ら主催者として活動し、地域主体の活動にしていかなければならないため、包括が主導になりすぎない活動にしていけます。

区役所からのひとこと

認知症の早期発見・早期対応、経済的課題の共有を目的として郵便局や金融機関、福祉関係機関以外の社会資源への啓発活動や取り組みは先進的であり、課題解決に向けたネットワーク構築に繋がっていると思います。孤立化防止、男性高齢者の地域参加促進については、他の圏域においても課題となっており、男性高齢者の集いの場の立ち上げ方法や継続の秘訣を、他の地域でも共有して広がっていくことを期待しています。

西成区玉出地域包括支援センター
(社会福祉法人白寿会)

HPはこちら



つながり支援事業

「孤立しない・させない まちづくり」

1

地域ケア会議から見えてきた課題

【個別支援・課題抽出・振り返りの地域ケア会議から】

多重債務、セルフネグレクトなど複雑な事情により支援期間が長期化する。

高齢者と支援が必要な親族で構成された世帯で、複数課題を抱えている。

生活の困難さの背景に認知症や精神疾患がある。社会的孤立状態のため発見が遅れ介入までに時間を要する。

【自立支援型ケアマネジメント検討会議から】

男性高齢者に対する生活習慣の指導や日中活動の場が必要。

2

対 象

玉出・南津守・千本地域在住のひとり暮らし・夫婦世帯・地区ネットワーク委員会
民生委員会・地域のケアマネジャー・介護保険事業者など

3

具体的な取り組み内容

【つながり支援体制づくり／圏域3地区で展開している地域活動の発展】

NPO法人立の交流スペース「あゆみ工房」(南津守)

玉出包括 サテライトスペース「みんなの居場所」(玉出)

成南ランチ主催 めぐみ喫茶(千本)の合同連絡会を行った。

開催は生活支援コーディネーター、ボランティアセンターの協働で、活動から見えた地域の課題と今後の展望について意見や方向性を共有した。

「あゆみ工房」では、それまでの囲碁・将棋・絵手紙・手芸・編み物サークルだけでなく、パラリンピックスポーツのボッチャの普及活動を通じ、男性も加入しやすい場となった。区内のボッチャ大会にもエントリーし、地域住民、包括職員の合同チームで参加。障がい事業所など諸団体との交流を図った。

「みんなの居場所」は閉店した喫茶店という利便性を活かし、世代を問わないカフェスペースとサービス利用者が講師となり、絵手紙や書道など趣味を活かしたサークルを開催。高齢者がサービスの受け手になるだけでなく、役割や生きがい、楽しさを持って暮らすというイメージを発信し、新たなボランティアの発掘にも繋がった。

「めぐみ喫茶」は長年、地域住民の交流の場であったが、集団に馴染みにくいひとり暮らしの男性やデイサービスに繋がらない利用者向けの喫茶スペース「りんどうのつどい」という新たな事業展開を行った。



地域特性

- ①南津守：工業跡地に戸建て住宅が立ち、年少人口が増加傾向。地域活動は活性化している一方、集合住宅にはひとり暮らし(特に男性)世帯が多く、地域との関係が希薄。
- ②玉出：買物・交通至便の地区。総合相談件数も最多。ネットワーク委員・民生委員の活動も盛んだが、担い手の高齢化が課題。
- ③千本：築古の文化住宅・集合住宅が密集。商店街も含めて空家・空店舗が目立つ。地域に根差した活動と住まいの長い住民同士の交流がみられる。

4

取り組んだ成果と今後の課題

【取り組んだ成果】

活動を通して3つの地区の課題を住民目線で知ることができた。お互いの活動を知りニーズに合った活動とボランティアのマッチングについて考えることができた。

取組後、「あゆみ工房」では新たなボランティアとの出会いにより大正琴、紙芝居の会を隔月開催することができ、参加者や協力者を増やすことができた。

「みんなの居場所」は元が地域で長年営んでいた喫茶店という知名度とアクセスのしやすさを活かし、実際の取り組みに関する紹介動画を作成。ネットワーク委員会の会合で上映。紙面で紹介するよりも分かりやすい広報媒体を作り、新たな周知方法を見出すことができた。男性の利用者がコーヒーを飲みながらマイペースに過ごしたりかつての趣味(楽器演奏など)を披露できる、自由に「自分を発信」できる場所という新たな切り口も見出すことができた。居場所に来る事で、お互いの安否を確認する、近況を報告する事で変化に気づく、気にかかるというさりげない住民同士の繋がり作りが叶った。

めぐみ喫茶の併設として開始した「りんどうのつどい」はデイサービスに拒否的だった認知症の人でも、のんびりお茶を楽しむ時間を過ごす場所ができることで閉じこもりや精神的な安定を図ることのできる新たな居場所となった。

【今後の課題】

住民がインフォーマルサービスの担い手になれるという可能性や潜在した能力、強みをいかに引き出していくかが重要。



包括からのひとこと

西成区の特徴として、単身者が多く、血縁、地縁が希薄な住民が多いです。とはいえ長年馴染みあるこの街で、元気に暮らしたいという気持ちを生み出し、持ち続けて頂くためにはあらたに「知縁」でつながるというネットワーク構築が重要です。

サービスの受け手となりがちな高齢者が、主体的に、また役割や生きがいを持ってまちづくりに関わるができる方法を、包括の役割としてこれからも考えていきます。

区役所からのひとこと

3地区合同による連絡会にて、活動から見えてきた地区の特性と課題を住民目線で考え分析できたことは大変有意義であったと思います。既存の資源を見直し、閉じこもりがちな高齢者も参加しやすい「りんどうのつどい」を新たな居場所として併設できたことは画期的な取り組みであると思いました。今後も閉じこもりの高齢者への誘い出し、利用者の増加について期待しています。



身近な資源を活用しつながりが持てる体制づくり

1

地域ケア会議から見えてきた課題

ひとり暮らし高齢者、特に男性は地域とのつながりが希薄である。

世帯で課題があり、他機関との連携強化が必要である。

認知症支援を含め、急激に状態が悪化し介入するケースが多く、自立生活を送られている方でも何らかのつながりは必要である。

2

対 象

圏域内地域住民

3

具体的な取組み内容

(1)平成30年度から「気配りさん登録」の活動をしている。

この活動はちょっと聞きたいこと、気になることがあれば包括へ話してみようという関係づくりになっている。

活動を通じ、近所で気になることや自然にお世話をしている事が、おせっかいではなく困った時のお互い様意識の向上になり、高齢者、認知症の人にもゆるく優しくつながる取り組みにもなっている。

令和元年度にも更にこの活動が広がるように周知活動を行った。

- ①地域で活動しているいきいき百歳体操や集いの場
- ②介護相談の中から知り合った家族や近隣住民
- ③商店街店舗やスーパーマーケット・コンビニ等に出向き周知活動を行った。

「気配りさん登録」された方に聞き取りカードで聞き取りする方法も行いました。

(2)松之宮地域の町会と見守り相談室と連携し「見守りマップ」を作成しました。

ひとり暮らし高齢者・知ってる人等色分けにして、地域が今どんな実態なのか課題は何なのか話し合い共通認識を持った。

(3)北津守地域では生活支援コーディネーターと連携し、北津守地域での生活ニーズアンケート調査について行った。



地域特性

担当圏域5地域ともに、独自性を持ち地域活動も活発である。地域関係者の高齢化が課題であり、次世代への引継ぎもPTA関係者を巻き込む等工夫しているが、深刻化している。社会資源が乏しい地域もある半面、交通機関も充実し生活施設も点在している地域もある。また市営住宅も多いが住民の高齢化及び独居率が高く、閉じこもりがちなひとり暮らし高齢者へのアプローチが必要である。近年民泊が急増し、それにまつわる近隣トラブルの増加や外国人、高齢者、障がい者、生活保護世帯などの複合的課題を抱えており、相談内容が多様化している。

4

取り組んだ成果と今後の課題

(1) 気配りさん登録数は事業所・店舗数は44店舗、個人登録数が227名だった。

前年度に比べ事業所・登録数は10店舗、個人登録数は52名増えた。

商店や店舗・コンビニ等に包括の場所や役割を周知し、職員の顔を知ってもらえ気軽に相談できる関係性を築くことで相談数の増加にもつながった。コンビニで様子が気になる方について連絡が入ったこともあった。

店舗では「気配りさん募集」のチラシを貼っていただき周知される方も少しずつですが増えてきた。

認知症にやさしい商店街を目指しての取組後、地域の誰もが集まれる場所があったらいいなと自主的に活動を開始され「すまいる」の場が週1度定期的に開催されることになった。

(2) 松之宮地域の町会でのマップ作りについては、町内会での課題が共通認識ができ、高齢化が進む地域の中でもゴミ出しや回覧版について苦情が多いが、今まで通りではなく気になる方については積極的に声をかけて愛の一声活動の歴史をつなげていこうと話され、区内のシンポジウムで地域の見守りとして発表された。

(3) 北津守地域での生活ニーズアンケート調査の実施に関わり、介護保険事業者数や利用者数、買い物回数、地域資源等について聞き取りする中で、地域関係者とも連携強化できた。

包括からのひとこと

どんなことでも一人で抱えずに声をかけあいながら話をするのができる大切さについて改めて実感します。

住民同士・住民と専門職・専門職同士・社会資源と住民、つながりを容易にし適切な時期に適切な機関へつながることができる環境づくりが求められている。日々の業務で役割を持ちながら働きかけたいと思います。

区役所からのひとこと

「気配りさん」の店舗等登録数と個人登録数は年々増加しており、認知症の人が安心して暮らせるように、地域住民への普及啓発活動にご尽力いただいています。また、松之宮地域町会では、高齢者世帯、子育て世帯、見守りが必要な世帯等をシールで色分けをし、地域の見守りツールマップが完成しました。高齢者や外国籍住民が増える中、近隣との繋がりと見守り体制の強化に確実につながっています。



東淀川区地域包括支援センター
(社会福祉法人大阪市東淀川区社会福祉協議会)

孤立傾向にある方の困りごとの早期発見と早期支援へつなげる 取り組み(見守り・見守られる仕組み作り)

1 地域ケア会議から見えてきた課題

- ・認知症、ひとり暮らし、キーパーソンが不在で、公共料金や家賃の支払いが出来ず生活が成り立たない。
- ・生活保護世帯で「ごみ屋敷」、介護拒否、低栄養など区の訪問員の関わりがあっても課題が表面化せず、地域からの苦情など支援困難になってからの関り。
- ・孤立化防止を地域に投げかけるだけでなく、「見守り・見守られる」というメリットを伝えるなど一緒に取り組んでいける工夫が必要。

2 対 象

地域の活動者(町会役員・民生委員・女性部などの地域での活動者)、地域住民

3 具体的な取り組み内容

❖ほほえみカレンダーの配布❖

町会未加入、相談数の少ない集合住宅を対象に相談窓口・介護予防の啓発を実施(2,407部)。UR住宅においては全戸配付実施(1,303戸)。市営住宅では地域活動者によるポスティングを実施。住民同士の支え合い活動の契機となった。

❖新たな地域での小地域ネットワーク会議開催❖

“地域について何でも話そう会”を実施。医療・介護・福祉の専門職と住民の協働で、認知症をテーマに地域課題、地域でできる支援や目指す地域像を検討した。

❖出張相談の拡大❖

各地域で実施されている「ふれあい喫茶」「食事サービス」で相談コーナーを常設。未実施だった会館での常設をすすめ、計6か所で実施。延210名の相談を受けた。

❖おやじカフェ立ち上げ支援❖

ひとり暮らしで地域との繋がりが少ない高齢男性の多い地域で、男性を対象に生活支援コーディネーターと共に講座(コーヒーの淹れ方)を実施。14名の参加があり、新たな居場所づくりと男性活動者の育成を支援した。



地域特性

昔からのつながりが残っている地域がある一方、大型マンションやワンルームマンションなど、地域とのつながりが希薄な地域もある。市営住宅やUR賃貸等の集合住宅が多く、ひとり暮らし高齢者世帯が多い。

4

取り組んだ成果と今後の課題

成果

<周知・関係づくり>

総合相談が前年より14%増。また相談実人数は52%増。ほほえみカレンダーの活用が多く見られ、介入拒否ケースにおいて、カレンダーで包括を認識していたことで支援に繋がった事例も複数ある。地道な周知活動継続による件数増と考えられる。

<小地域ネットワーク会議>

過去開催したことのなかった地域で実施でき、課題共有、解決の検討の場として有効と継続開催希望の声が地域活動者よりあがり、定期開催を予定。

<ささえあい活動>

地域活動者によるほほえみカレンダー配布については、住民が主体的に見守り活動を行う機会を提供でき、住民の互助意識の向上につながっている。

<新たな居場所づくり>

おやじカフェについては、講座修了者が運営ボランティアとして活動。月1回カフェを実施し、利用者も39名と多く新たな地域の居場所と男性が地域で活動できる場となっている。

課題

- ・見守り見守られる仕組み作りについては地域によって取組みに差がある。地域に合った形での取組みを多職種協同で更に広げていく必要がある。
- ・周知啓発の取組みから、包括が高齢者の相談窓口であるという認識は増しているものの、世代により知名度にばらつきがあると考えられるため周知活動の展開の検討が必要。

包括からのひとこと

オリジナルキャラクターのカレンダーを職員の手作りで作成。印刷したものを障がい者作業所で袋入れ作業、配布については地域活動者から、とカレンダーをツールとした支援者・関係者のつながりも意識して取組みました。



オリジナルキャラクター“ほっほ”

区役所からのひとこと

相談数の少ない地域にアプローチしカレンダー配布を行う取組みは、カレンダーの作成から職員や障がい者作業所が連携し地域活動者とともに配布され、気になる高齢者に関する相談につながり、見守り見守られる関係づくりが形成されています。生活支援コーディネーターと取り組む居場所づくりは、男性活動者を支援する先駆的な取組みとなっており今後の展開に期待しています。



阿倍野区地域包括支援センター
(社会福祉法人大阪市阿倍野区社会福祉協議会)

チャレンジ!!「交通弱者(高齢者をはじめ、障がい者など)の移動手段の確保を目指した交通環境の整備されたまちづくりをめざす」(PART3)

1 地域ケア会議から見えてきた課題

地域の会館にも、徒歩では行けない方が、「閉じこもり状態」となり、フレイルを招く危険性がある。

- ・今の公共交通の利便性が確保されていないエリアがある。
- ・運転免許を持たない高齢者や障がい者は、家族や親戚が移動支援する場合もあるが、移動手段がなく外出が不便な状態の人も少なくない。

2 対 象

圏域内(老人福祉センター)で開催している認知症カフェ「ほのぼのあいちゃん」に参加したいが、徒歩ではいけない方
MCI(軽度認知症)の方の集いの場「脳とからだのワーク」の参加者

3 具体的な取組み内容

- ①圏域内で開催している認知症カフェ「ほのぼのあいちゃん」の参加者への支援
 - ・交通手段がなく、老人福祉センターに行けない認知症の人やその家族が、安心して集いの場に参加できるように、移送ボランティア養成講座受講後のボランティアの協力を得て送迎いただき参加できた。
- ②MCI(軽度認知障がい)の方の集いの場「脳とからだのワーク」の参加者への支援
 - ・MCIの人でも区社会福祉協議会に自転車などと思われる方がいたが、道に迷うことがあったため、送迎は必須と考える。集いの場への参加につながることで、そこから介護保険サービスの利用に繋がることもある。
- ③傾斜のある地域での配車システムの取組み
 - ・企業とのコラボで、近くの公共交通の駅までの配車を行う。近畿運輸局大阪運輸支局にも、地域の現状を報告した。地域のニーズについて、アンケート調査を行うことになった。



地域特性

地理的特性 阪南地域：南北に長く中心に大きな道路で、南側と北側に分断されている。北側は公的に集える場が集中、南側は比較的少なく南側から北側方面へ行くニーズは多い。交通手段は自転車為主で、歩行困難な方は移動の不便さがある。

晴明丘地域：上町台地～西側に向け傾斜が続く。標高差が12mで坂道となる。南北に交通手段があるが、東西にはない。医療機関、商店が少なく、集いの場の会館は坂道があり、歩行困難な高齢者には不便である。

長池地域：南北約2kmの地域、地下鉄の駅が2つあり、JRの駅が地域の南東端に位置し、駅まで徒歩で行けない高齢者も多い。区役所へは複数の乗り換えが必要で、役所の手続きや講演会に参加するにも不便である。

4

取り組んだ成果と今後の課題

①圏域内での認知症カフェ「ほのぼのあいちゃん」の参加者は、安定した人数で開催された。カフェのボランティア（認知症サポーター養成講座の受講者）の自主的な働きと、ボランティア送迎があることで遠くても安全に参加でき、認知症の人や家族もほっとできる場の一つとなった。

（課題）認知症カフェというネーミングを気にされて「そこに行くと、周りの目が…」と言われる家族もあり、認知症への偏見や正しい理解を更に広げる必要を感じた。

②月に1回ではあるが参加者自身が、慣れてくることで受け身ではなく、自分からできることを進んで行う姿が見られるようになった。他の集い（介護保険サービス）にもスムーズに参加できるようになった。

（課題）ボランティアによる送迎は、ボランティアが高齢であるために、その送迎に支援者が必要となった。他の事業と連携しボランティア育成が必要となっている。

③企業からの積極的な協力を受け、近畿運輸局大阪運輸支局も、地理的な特性を理解していただき、外出手段に支障があるなら閉じこもりになることがないよう、交通手段の一つとなればということで、まずは住民意識についてアンケート調査を行うこととなった。

（課題）新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため外出自粛となり、この計画が現在進んでいない状態である。

包括からのひとこと

小地域ケア会議や地域診断を行う中で課題としてあがった「交通弱者」の問題です。3年間を通してアンケートや企業への働きかけ、様々なご意見をいただき何かできることはないかと検討してきました。フレイルにならないように、外出する機会を減らさないように、様々な方法を考えていますがその都度壁に当たっています。そこから新たな課題があがることで、包括として何ができるかを今後考えていきます。

区役所からのひとこと

地域の役員へ今困っていることはないかという声掛けから入り、移動ボランティアの育成までつなげる発想、人と人とのつながりづくりを重視した活動は地域に根差している日頃の成果の賜物と感心します。またアンケートを行い課題として視覚化しまとめ、包括の活動として信頼がおけるものと感じています。地域からあがった声を生かし、包括から法人（社会福祉協議会）へ事業をうまく繋いでいけるよう期待しています。引き続きよろしくお願いいたします。



気軽に助けを求められる地域づくり

1 地域ケア会議から見えてきた課題

- ・ 複合ケースの増加
- ・ 地域支援者の高齢化による次世代支援者がいない
- ・ 地域の対応力の向上が必要・地域の社会資源がわかる情報ツールがない
- ・ 銭湯減少による諸問題

2 対 象

地域の支援者・住民・各関係機関

3 具体的な取組み内容

- ・ 地域の会館や区民センターで実施することの多い講演会や介護予防教室などを、地域の施設等に場所提供していただくことで、地理的に参加が困難であった方が参加できるよう実施した。
- ・ 小地域ケア会議の開催時に、地域の障がい関連施設に場所提供していただくなど、参加者に地域のことを知ってもらう機会を持った。
- ・ 新たな活動の場として、男のつどいや介護予防運動教室等の集いの場の開催支援を行った。
- ・ 地域住民の趣味を活かして講師をしていただくなど、ボランティア参加等もしていただけるよう活動した。
- ・ 毎年継続実施している小学校での認知症学習で、児童が家族と一緒に考えてもらえる内容で実施した。
- ・ 地域の銭湯の休業日に、場所提供していただくことで、男のつどいの開催支援を行った。
- ・ 講演会や地域の催しの際に、若い世代の方々が興味を持って参加して頂けるよう周知した。
- ・ 社会資源ツールを協議体で作成。
- ・ 銭湯減少による諸問題については、協議体にて検討していくこととなった。



地域特性

地域によっては地域支援者の協力も大きいですが、支援者が高齢化しており、次世代を担う方がいない。また、活動場所が限られており、男性が集える場所も少ない。

4

取り組んだ成果と今後の課題

【成果】

- ・地域の障がい関連施設に場所を提供していただき、小地域ケア会議の開催や介護予防教室を開催することで、地域の施設等を知っていただく機会となり、施設と住民との関係が深まった。また、地理的な問題で、参加しにくかった方が参加することができ、活動場所が増えた。
- ・地域住民の趣味を活かして講師をしていただくことで、参加側では参加されなかった方の活動場所ができた。
- ・地域の銭湯に場所提供していただき、男のつどいを開催支援することができた。
- ・これらの活動を実施することで、地域住民同士の関係構築や気軽に相談できる機関や人を知ってもらう機会をつくることができ、個別相談対応等の早期発見早期対応に繋がっている。

【課題】

- ・地域の社会資源などを知っていただく機会を持つことで、共生に繋がっている地域もあるが、偏見を持った方もおられるため、更なる周知活動を通して、自らの地域の実状を知ってもらう機会をつくり、周知していく必要がある。
- ・活動参加はされるが、主になって活動してくださる方がいない。
- ・男のつどい等活動の場を増やすことはできているが、参加者が増えない集いもあるため、活動内容や周知に工夫が必要。
- ・地域資源ツールについては、年度内に作成できなかった。次年度中には作成できるよう活動する。

包括からのひとこと

コロナ禍の中ですが、感染予防対策をしながら、地域住民の皆様の声を直接聞ける距離で活動し共有しながら、気軽に助けを求めることができるような地域づくりを地域の支援者・地域住民・地域の関係機関等の皆様と一緒に、進めていきたいと思っています。

区役所からのひとこと

子どもや若い世代に対し認知症について伝えていく必要性を感じている視点がすばらしいと思います。地域役員の思いをきちんと汲み学校とも連携をしている熱意は、「何かあれば中部包括」と地域が言うほどであり、区役所も信頼をおいています。また地域役員や参加者が固定されたり参加人数が減少していることは課題と思いますが引き続き参加しやすい環境について中部包括であれば地域と一緒に検討していけると実感しています。よろしくお願いします。